

計画の対象範囲（史跡指定範囲と隣接関連地）

本計画の対象とする範囲は、指定を受けた「史跡 小泉八雲旧居」に加え、史跡の保存、あるいは景観保護のために重要な隣接関連地である「小泉八雲記念館」および「北側保全地」としています。



小泉八雲（ラフカディオ・ハーン / 1850-1904）は、作家、教育者、ジャーナリスト、日本研究者としての多彩な活動を通じて日本文化を世界に発信した人物です。

史跡小泉八雲旧居は、史跡松江城の北側、内堀を隔てた場所にある、松江藩における中級武士の武家屋敷の貴重な遺構です。明治 23(1890) 年に島根県尋常中学校の英語教師として松江に赴任した八雲は、武家屋敷に住むことを望み、住まいとしてこの居宅に移り住みました。

昭和 15(1940) 年に国の史跡に指定された旧居は、大正 9(1920) 年から一部が一般公開されており、松江市の代表的な文化観光施設として、国内外から多くの方が訪れています。

八雲が著作『知られぬ日本の面影』の「日本の庭」で詳しく描写した、主屋や供待部屋、塀、土蔵等の建物や庭、周辺の景観は、現在まで良く保存されています。

松江市では、今後も旧居を当時の姿をよく残す形で継承して、より良い活用を図ることを目指し、保存活用計画を策定しました。

計画期間

本計画の計画期間は、令和 8（2026）年 4 月 1 日から令和 18（2036）年 3 月 31 日までの 10 年間とします。

史跡小泉八雲旧居

旧居は根岸家の所有で、小泉八雲は根岸氏の留守宅を借り受けて居住しました。八雲はこの住まいに感動し、著作の中で気に入すぎたようだと言っています。

旧居は平成 31（2019）年に松江市が取得するまで、根岸家により良好に保存継承されてきました。

庭園についても、根岸家が作庭し長年管理してきたものです。

小泉八雲記念館

旧居の史跡指定に先立つ昭和 9(1934) 年には旧居の西側隣接地（奥谷町 322）に八雲の資料を保存・公開し、その功績を後世に伝えるための資料館である小泉八雲記念館が開館しました。

記念館には多数の貴重な八雲の関連資料が展示・保存・管理されています。

北側保全地

昭和 29(1954) 年に松江市は、八雲の著作で著された旧居からの竹藪の景観を保全、修景するため、旧居の北側の隣接地（奥谷町 318-6）を北側保全地として取得しました。

この区域は主に山林となっており、八雲が親しんだ光景が今でも残っています。

史跡の本質的価値

① 八雲が著作『知られぬ日本の面影』で描写している光景が残されています

② 松江藩における中級武士の武家屋敷として現存する貴重な遺構です

目指す将来像

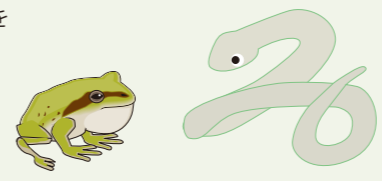
八雲の暮らし・世界観^註を体感できる貴重な武家屋敷である旧居を守り活かす

註：本計画において「八雲の世界観」とは、『知られぬ日本の面影』で表現された八雲が感じた世界のことをいいます。

史跡全体が良好に保存されている旧居では、今日でも来訪者が八雲の在住当時にタイムスリップした気分で、庭や建物を見て八雲の生活や作品の世界に浸り、同時に武家屋敷の風情を感じることができます。

施策内容

- 計画策定**
- ・整備に必要な調査を行い、「史跡小泉八雲旧居整備基本計画」を策定します。
- 保存・管理**
- ・史跡の日常点検・維持管理を徹底します。
 - ・庭園の植栽栽培管理計画を整備・更新します。
 - ・庭園の石造物等を調査し台帳を整備します。
 - ・史跡北側の境界を明確にし、当時の姿をより分かりやすくします。
 - ・北側保全地の景観（旧居から竹藪への眺め）を保全します。
- 活用**
- ・旧居と記念館を相補的に活用し、発信します。
 - ・八雲ゆかりの他都市との連携を強化します。
 - ・学校教育や地域学習でのさらなる活用を促進します。
 - ・松江城周辺の回遊性の向上をはかる取組を行います。
- 調査**
- ・旧居や八雲に関する調査研究をさらに推進します。



基本方針

保存・管理

建造物や、庭園、地形や地割・眺望、地下に埋蔵されている遺構や遺物を適切に保存することはもちろん、その周辺環境も含めて保全し、後世に継承していきます。

活用

八雲の著作に表現された暮らし・世界観を体感できる武家屋敷である旧居を、まちづくり、人づくり、仕組みづくりにさらに活用します。

八雲在住時の姿が失われている第三の庭については、八雲が暮らしていたころの光景の再現や効果的な使い方を検討します。

調査

小泉八雲研究や八雲在住時の旧居の姿、武家屋敷としての調査研究を継続して行います。

建造物や庭園を確実に保存・活用するために必要な調査、特に強化が必要な防災・防犯を目的とする調査は早急に行います。

整備

旧居を末永く保存・活用するために必要な整備を行います。

八雲在住時の姿が失われた要素については、適切な方法で顕在化することを検討します。

運営・体制

本計画の着実な実施ならびに推進を図るために、関係団体と連携した運営・体制を構築し、旧居を守り活かしていきます。

今後、松江市は、この旧居の史跡としての本質的価値ならびに関連する構成要素に一層磨きをかけることで、八雲の暮らし・作品の世界観を体感できる唯一無二の空間の創出を目指します。

- 防災**
- ・危機管理マニュアル、避難計画を策定します。
 - ・危機管理体制を整備します。・防災に係る周知を行います。
 - ・建造物の耐震診断と耐震補強を行います。
 - ・防火設備・防犯設備を強化します。
 - ・排水性向上に向けて、地形調整・設備を再整備します。
- 整備**
- ・建造物を適切に修繕し、将来的には大規模な修繕を行います。
 - ・主屋の公開範囲の拡大とそれに伴う整備を行います。（バリアフリー化、エアコン等の設置、展示内容の充実など）
 - ・主屋以外の公開範囲の拡大とそれに伴う整備を行います。（第三の庭の復元的整備・公開活用、史跡説明板の設置など）
 - ・腐朽している石造物等のレプリカを作成します。
 - ・土蔵の有効活用を検討し、それに伴う整備を行います。
 - ・北側保全地の保全と活用を検討し、それに伴う整備を行います。
- 運営・体制**
- ・継続的な八雲顕彰と施設運営体制を構築します。
 - ・緊急時の体制を強化します。
 - ・専門家との連携体制を整備します。
 - ・本計画の推進にあたり、庁内および、関係機関と適切に連携します。

八雲があこがれた武家屋敷での暮らし・作品の世界観

八雲はこの居宅を生産に生きた家なかで最も気に入り、著作 *GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN* (『知られぬ日本の面影』) (ホートン・ミフリン社、1894年) の「日本の庭」のなかで、この屋敷の庭を通じて学んだ日本人の自然観について述べています。

旧居での八雲の生活の詳細については、当時の住込み女中を勤めた高木八百 (当時 18 歳) らに聞き取りをして書き記した『松江における八雲の私生活』 (桑原羊次郎、島根新聞社、1950年) から伺えます。

これらを参考に八雲の暮らし・作品の世界観の一部を現況図に示しました。現在まで継承されているものもあれば、劣化しているもの、失われているもの、調査が必要なものなどもあります。

今後、松江市では保存活用計画を推進し、旧居での八雲の暮らし・作品の世界観を体感できる唯一無二の空間の創出を目指します。



庭の裏手の山を覆っている高い森は、鳥の宝庫である。

第一の庭

他の世界から完全に隔離された空間として、ナンテンやシトロン、石灯籠等の様子を古いことわざや詩などを交えて描写しています。

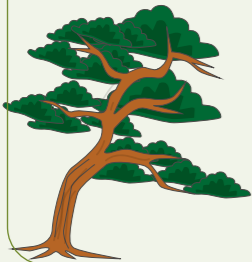
見事な日本の梅の木である。



蝉の一群は私のちょうど頭上にある梅の枝で、...



このきわめて上品なシトロンの木は、...



城の天守閣に見られるような鯨



ひとつは赤い実をつけ、もうひとつは白い実をつける。

第二の庭

八雲お気に入りの庭で、ハス池やその中の島等の様子を描写しています。

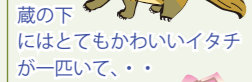


池のどこかの岩間には、亀が一匹住み着いている。

三種類の蛙は蓮池に住んでいるが、...



池の上を何種類もの美しいトンボが飛んでいる。



蔵の下にはとてもかわいいイタチが一匹いて、...



蛇たちが泳ぐ姿は、これまた見事である。



美しい睡蓮が、その鮮やかな緑の水盤状の葉を油を浮かべたように水面に浮かべている。

第三の庭

北側と北東側のエリアには、井戸や祠、キク畑があることを紹介しています。



日本の菊や樹木にまつわる怪談や俗信を紹介しています。



日本の庭園は、庭であると同時に、一幅の絵であり、一篇の詩であるともいえる。

この庭では、どんな生き物もこの屋敷の人間を怖がる様子はない。

当時の当主 (根岸氏) が茶室を模して作った 6 畳敷の書斎は、主に八雲の創作の場でした

客間を兼ねた居間は、八雲のお気に入りの部屋で、西・南・北の三方の庭を同時に眺めることができます

土蔵

聞こえてくるものどいえば...池に飛び込む蛙の水しぶきだけである。

日本庭園の美を理解するためには、石の美しさを理解しなければならない

どの部屋も天井が高く、ゆったりとして美しい。

全体の趣としては、どこことなくもの悲しくて、ものうい場所を静かに流れている川の岸辺といった風情である。

庭はほかの世界から完全に隔離されているからだ。

この大きな石の魚は想像上の海豚のことで、頭を地面につけ、尾を空中にはね上げている。

第三の庭

風呂場の天井に巣を作った燕もいた。

夜に飛んでくる訪問客の中には...カマキリである。

屋敷の前面には、表門および瓦葺で腰板付きの土塀があります

壊れかけた笠石の下に厚く苔蒸した古い土塀は、町の喧騒さえも遮断してくれるようだ。

屋敷

元治元 (1864) 年以前の建築と推定され、中級武士の武家屋敷としては、全国的にみても地割のみならず、庭まで良好に維持されている稀有な例です。

主屋は、一部二階建て、寄棟造、棧瓦葺で、南向きに建てています。間取りも含めてほぼ八雲在住時のまま保存されており、居室の配置からはセツと八雲の暮らしぶりを思い描くことができます。

その他「日本の庭」に登場する動植物 (一部)



大きな枝から小枝まで、みやびやかな花の露に覆われてしまうのである。

どんなときでも大歓迎なのは虫である。

風に揺れるその葉は、人が手招きしているように見える

旧居での八雲の暮らし

- ・ 8 時ごろ起床し、台所で洗面しました。
- ・ 朝食は牛乳 2 合、生卵 5 個を食べていました。
- ・ 通勤は 8 ~ 9 時で、昼頃帰宅しました。
- ・ 昼食は、曳野旅館から取り寄せました。煮しめ物と卵をつかった日本料理を好みました。
- ・ 日光に当たるのは大好きで、庭の飛び石や荒砂の上に度々大字になりました。
- ・ 夕食は必ず洋食で材木町 (現東本町) にあった「魚才」から取り寄せました。必ずビーフステーキがあり、コーヒー、パンが付いて 5 品ほど。
- ・ 夕食後に必ずビール 2 本を飲みました。肴は、卵黄製の黄色い花弁で中央が紅色の「黄金牡丹」という柔らかい菓子を 5 ~ 6 個。
- ・ 葉巻と日本の刻み煙草を好みました。
- ・ 書斎で執筆し、10 時頃、中央の九畳の間で敷布団を沢山重ねて寝ました。

紺色の文字：『新編日本の面影』 (池田雅之翻訳、角川ソフィア文庫、2000年)

茶色の文字：『松江における八雲の私生活』 (桑原羊次郎、島根新聞社、1950年)

